

代名言 (四)連體言 (五)活用言 (六)形容言 (七)接續言 (八)指示言 (九)感動言の九つである。實體言は今の名詞、虚體言は大體今の形容詞、形容言は副詞にあたる。連體言とは活用言が現在、過去、未來の助辭をふまへて實體言につづくのをいふ。また接續言には今の接續詞の外に助詞もいくつか入れられてゐる。この各々が例へば實體言をゐることば、虚體言をつづくことばといふやうに、國語的によばれるやうになつてゐる。さうして九品の中が夫々また頗るこまかく分けられてゐる。

また九格といふのは、西洋文典の *cases* を土臺にしたもので、(一)能主格 (二)所生格 (三)所與格 (四)所役格 (五)所奪格 (六)呼召格 (七)現在格 (八)過去格 (九)未來格の九つ、前の六格は助詞に關するもの、後の三格は助動詞に關するものである。未來格の中には「ず」「ぬ」「じ」等も入つてゐる。

語學新書の説は戊申の獨創ではなく、藤林淳道といふ蘭學者の和蘭語法解(文化十二年板)に説くところを土臺とし、これを國語にあてはめたものではあるが、國語を文法的に整理しようとした最初のものとして、注意しなければならぬ。

井伊直弼の知遇をうけて、將軍繼嗣問題や外交問題で公武の間に周旋活躍し、安政の大獄までひき起して、幕府の衰運を挽回しようとした長野義言は、一面には歌學語學に長じた學者であつた。文久二年(二五二二)八月、反對派にはかられて禁錮せられ、ついで國を亂さむとするを名として、死に處せられた。四十八歳。

國語關係の著書には、玉の緒末分佈、活語初の葉等がある。これらについては前講一八八頁、同二三一頁に略述し

た。詞の玉の緒、詞の通路等の補正とみるべきである。

萩原廣道は岡山の人、野々口隆正の門に學び、最も源氏物語にくはしく、源氏物語評釋は名著として、花宴までに止まつてゐることを惜しまれてゐる。大阪にうつつたのは三十餘歳のころであらうか。「こたび萩原ぬし吉備のくにより來りてながくこの處にをらむとす。」と西田直養が係辭辨の序にしるしてゐる。それは弘化三年で廣道三十四歳の時である。文久三年(二五二三)五十一歳で歿した。

廣道の國語學方面の著書としては、てにをは係辭辨(前講一八八頁)が有名である。玉の緒を正したもので「はも徒」の説に對しては感心せられないが、「そのや何」からの「と何」とを省いてかを入れた點は、現在も從はれてゐるのである。

また初學の便利の爲として、古言譯解一冊がある。鈴木朗の雅語譯解と同形の小本で、雅語譯解が中昔以後の語を集めてゐるのに對して、古事記、日本書紀、萬葉集等の假名がきの語を主として集めて、俗解を附したものである。嘉永元年(二五〇八)に出來た。

また小夜しぐれ一巻は宣長の玉霞にならつて、歌文の詞の用ひさま、意味等をのべたもの、自序のはじめに標題をかねて、

小夜しぐれまたおとたてゝいきたなき學のまどをおどろかさばや

とあるのも、玉霞と同じ仕方である。辨玉霞論評、辨玉あられ論脱漏が附録せられてゐる。

石川雅望の雅言集覽を増補して、増補雅言集覽を成した中島廣足は、肥後の人、本居太平の門人で、長崎に住んで教授し大いに名聲があつた。樞園文集は今中等學校の教科書中にもとられてゐるが、樞園はその號であつた。元治元年（二五二四）七十三歳で歿した。増補雅言集覽は三冊、明治二十年に、その孫中島惟一によつて刊行せられた。

この他になほ詞玉緒補遺（前講一九一頁）、詞八衢補遺（同二三二頁）、玉霞窓廼小篠等がある。玉霞窓廼小篠は前編三卷後編二卷、前編は文久元年に刊行せられたが、後編は明治二十一年の刊行である。はしがきに左の如くある。學の窓に音たてられし玉霞よ、耳とき人はとくき驚きて、いぎたなかりし夢も残らず、こゝろさやかにになりたるを、猶耳おほしきはたしかにも聞しりえずて年ふりがちなるおほかめり。しのやの軒に降る霞も其こたふる物によりておとさやかにきゝなざるゝものなれば、こたび其あかすとすべき歌文どもをこれかれ書いでつらねあげて、初學の友のしるべとなしつるは、これをもてかのあられの音をいよたしかに聞しらせむとてのしわざなりけり。さるはふるき歌に、さゝ葉にうつやあられのおとたし〜にとよめるをおもひてなれば、やがて窓の小篠と名づけつるになむ

嘉永の七とせといふ年の七月の末つかた

中嶋廣足しるす

書名の由來、著作の動機、書の内容等は大體これで知られる。本居宣長の玉霞には證歌があけてない故、それに対する證歌を出して註解を施したのである。但し前編の下から後編にかけては、玉霞と同じやうな趣のことを新に集め補つたので、玉霞とは關係がない。

黒川春村は江戸の人、淺草田原町に生れた。初め俳諧に志し、淺草庵守舎につき、その後をついで淺草庵といつたが、後には和歌に心をよせ、さらに古學を修め、考證を得意とした。慶應二年（二五二六）六十八歳で歿した。音韻考證二十二卷が語學關係の著書として注意せられる。太田全齋の漢吳音圖にもとづき、更に一步を進めたものであるが、刊行はせられなかつた。文久二年（二五二二）に出來たもので、凡例の中に、

皇國の古典を讀解むには、古音をも普く索りて、其易らかに讀得べき限は、異やうならず讀まゝほしき業なり。さるを、假令、日本書紀に茂羅玖毛と見ゆるは、叢雲なるを、もらくもとよみ、宇士多加禮斗呂々岐豆とある古事記の文をば、語格をも按はで、うじたかれとろゝぎてとよみ、萬葉集の眞祖鏡をも、まそかゞみとのみ呼なれたる類、古書どもに許多見ゆるは、たゞ後世の常呼に目なれて、古人の字音に密なりし事をば、さる所以ありとも思ひたらず、古言は今と異なるものなど、なほざりにおもひ過せる先輩の失にぞありける。……音韻の書は數部ありといへども、簡便にして了解易きは、韻鏡にまされるものなし、其韻鏡は數版ある中にも、漢吳音圖を最上と云べし。……然れば今我述ぶる所も、凡て其音圖に基づき、其音徴の體裁に倣へり。但其音徴と不盡と共に、全文を並べ載るは頗うるさき業に似たれど、二書の説と我僻案と、矛盾したるも少からねば、初學の徒通讀せざれば速に會得し難きが故なり。

漢字の古音の研究が國語の研究に必要なことはこれで考へられるであらう。

また活語四等辨といふのが一卷ある。これについては前講二三二頁に述べた。

大國隆正は津和野藩士今井秀馨の子、山本、野々口なども稱した。大國といふのは明治維新の頃からで、石見國廻磨郡大國村の大國主神に祈請して、氏を大國と改めたことである。國學は平田篤胤に學んだが、佛教や漢學や西洋の理學にも通ずるといふやうに、博學な人であつた。篤胤の學風をうけて、國學をもつて尊王愛國の大義を鼓吹し、間接に明治維新の大業を補翼したことが多い。それだけ國語の研究はその弊をうけたところが多かつた。神字原神字箋等をあらはして神代文字の存在を主張したのもそれである。活用に關する研究として、通略延約辨のことは前講二二三頁にのべた。活語活法活理抄といふのもあるが、これは活語の研究といふよりも、むしろそれによつて自己の哲學を説かうとする方が強い。その一斑を示すならば次の如くである。

あいうえおはことばの下につかず、らりるれはことばの上ををらす、その下につかぬあいうえおを、上にをらぬらりるれにはたらかせ考ふれば、生れ出て世に在るもの暴るれば廢れ、奉仕るれば長く有るものなり在りのうらに無しとはたらくことばあり。このはたらかは二行にわたりて、なしなきとはたらくなり。無し有りふたつは一對のことばにて、幽顯のわかるどころ、合離のはじめ、活理のよりておこるところなり。

我に本末あり、これを知るを活理をしる大本としるべきなり。我身にありては心を本とし身を末とす。我が家にありては父を本とし妻子を末とす。従者はその主人を本とす。我が所にありては領主を本とし臣民を末とす。地球上を我がといふとき、天皇を本とし外國の王どもを末とす。これを我國の大道とすることなり。

あいうえおに他行を借らずうえとはたらく言葉あり。又はひふへほにふへとはたらくことばあり。この一對は神理の世にあらはるゝはじめにて、この對格に大かた世の中の大理はそなはりてあるものになん。……うらに三つのわかちあり。身をうると身にうると心にうるとこれなり。父母によりて身をえ、産業によりて田宅財寶を身に得、公儀の法令によりて道をこゝろにえ、この三つを得て人はたれもく世にふるものなり。ふるにまた三つの差別あり。とし月をふるは天につくなり、くにところをふるは地につくなり、つかさくらむふるは大君につくなり。かるきものはその所の君につくなり。人は妻をえて子を得るものなり。子をうるによりてその家は世をふるものなり。君とある人は民に産業を得しめたまふものなり。忠孝貞その外善事をする人を賞したまふものなり。道に背くものあれば世にふることをえざらしめたまふものなり。

隆正は明治四年(二五三一)八十歳で歿した。

富樫廣蔭は紀伊の人、本居春庭に師事し、粗衣粗食に甘んじて刻苦勉強した。師春庭の歿した翌年、文政十二年から桑名にうつり住んで教授のかたはら著述に従事した。著作は多いが刊行せられたものは少かつたので、今あまり傳はらない。「氏は本居派の語學に詣深く、はた卓見も少からずといへども、家計上の必要より傳授料などを定め、束脩の如何によりて講説を異にせるより、その著作は刊行に至らざる者多かりきとかや。」と日本文法史にはいつてゐる。明治六年(二五三三)八十一歳で歿した。

その著書では詞の玉橋二巻が注意すべきものである。その一の巻は文政九年十一月に脱稿、文政十二年と天保十五

年と二回の訂正をへ、二の巻は文政九年十二月の起稿といふことである。この書で注意すべきは語の分類法であつて言、詞、辭に三大別し更に小分けしてゐる。

言

- 形言……………月、雪、花、鳥、山、川
- 様言……………物、事、是、故、春、秋
- 居言……………ウケ、ヤリ、宿、紅葉、戀、楯
- 略言……………歌、宿、來、オカ、ハル、遙
- 合言……………春日、秋山、山川、谷水

詞

- 四韵詞……………四段活用
- 一韵詞……………上一段活用
- 伊字韵詞……………上二段活用
- 衣字韵詞……………下二段活用
- 變格詞……………變格活用
- 音雜詞……………形容詞のク活、シク活

辭

靜辭
動辭

右の如くである。明治の文典にはこの書の影響をうけたものが多かつた。

以上所謂第四期、こゝに述べべき學者はまだあるが、今は省略に従ふことにする。この期の研究は多くは前人の研究の補正を主とするといふ具合で過ぎた。その中に鶴峯戊申の語學新書、富樫廣蔭の詞の玉橋等は新しい傾向として注目される。即ち一は西洋文典に則つて國語を整理しようとしたもの、一は鈴木朗の言語四種論や、義門の玉の緒線分中の説を發展させて、言語の分類を試み、在來のテニヲハ研究、活語研究をその下に整理説明しようとしたもの、いづれも、研究が部分的でない所が注意される。弘化二年（二五〇五）刊行の語學捷徑（又詞の捷徑とも。鈴木重胤著）も從來の種々の方面の研究を一つにとり纏めようとしたものである。蓋し假名遣の研究は第三期で完成し、係結びや活用の研究も十分にしつくされたといふ状態であつたから、さういふ部分的の問題でなく、これをとりまとめて國語全體を見て行かうとする機運は當然起るべきであつたらう。かうして次第に文典の形式に入らうとしてゐたのであつたが、それが明治初年に至つて一層促されたのは、明治五年の學制に小學に文法科をおかれた事からであつた。當時それに適當の教科書が無かつたので、その必要から教科書としての文典が生まれた。皇國文法階梯（高田義村・西海古海共著）皇國文典初學（黒川眞頼著）は共に明治六年に刊行せられて、そのはじめをなした。かくして文典の著は年と共に多く、内容も次第に整つて行つた。

一方また明治維新の改革的氣風は、森有禮をして日本語を廢して英語をもつて國語としようといふ考を起させた程で、國學者以外に國語の實際問題として漢字を排斥し、或は假名を、或はローマ字を國字としようといふ意見が起つて、國語研究に新しい方面が開けた。

○

明治十九年九月帝國大學に博言學科が創設せられて、はじめて言語學が講義せられるやうになつた。國語の研究に西洋に發達した言語の科學的研究法がとり入れられるやうになつたのはこれからである。よつてこれ以後を第五期としてゐる。もつとも博言學科が強大な勢力を有するやうになつたのは、明治二十七年に上田萬年博士が獨逸から歸朝して、この科を受持たれてからであつた。明治三十年には國語研究室が設けられて國語關係の書籍が網羅せられ、研究に非常な便宜を得た。國家的には明治二十七八年戰役があつて、一大發展があつたことであるから、この頃を境としてもよいと思ふ。

さて第五期とそれ以前とを比較してみると非常な相違がある。むしろ第二、三、四期を合して第二期とし、第五期を第三期として、三期に大別してもよいことは、前講の序説にも述べたところである。今この第五期について大觀するならば、それ以前に比して研究の範圍と材料とが著しくひろくなつたことが注意せられる。從來の研究は歌學の必要に應じて起り、國學の手段として行はれたといふ状態で、和歌を中心とし、平安朝時代以前の言語を中心としたのであつたが、現在は平安朝以後の言語、現代語も方言も研究の對象となつて、そこに何等尊卑の差別がおかれてゐな

いのである。更にアイヌ語、朝鮮語、琉球語等にも目がむけられるやうになつた。

次には從來はやゝもすれば國學的偏見にわづらはされて、獨斷的淺理的な研究が行はれたが、現在はそれがなくなつて、發達した多くの補助學科の力をかりて、科學的研究が行はれるやうになつた。科學的研究は、歴史的、比較的、歸納的研究の上に立つものである。

かうして國語の各方面にわたつて盛な研究が行はれてゐるのであるが、その實際について述べることの出来ないのは遺憾である。明治以後の實際は、

日本文法史 (明治四十年十月版)

福井久藏著

日本語學史 (明治四十一年十二月版)

長連恒著

國語學精義 (明治四十三年五月版)

保科孝一著

語學關係刊行書目 (明治元年ヨリ大正十五年ニ至ル
國語と國文學昭和二年五月號)

時枝誠記編

國語學附言語學參考論文目錄 (特別自明治十年至昭和二年邦文雜誌に現はれたるもの
國語と國文學昭和三年五月號)

田村榮太郎編

等によつて御覽を願ひたい。

—終—

昭和十年一月十五日印刷
昭和十年一月二十日發行

國語學史

國文學大講座 第二

國語學史

定價二圓八十錢

編輯者

國文學大講座刊行會

印刷者

代表者 吉川興志次

吉川與志次
東京市神田區小川町三丁目二四

東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行所

日本文學社

筆執家大門專各 座講大學文國

◇近世和歌史	◇國文學門題詳解	◇王朝文學概論	◇新古今和歌集講義	◇俳句選釋	◇有職故實	◇謠曲講義	◇言語學概論	◇文法及國語法
東京文理大教授 能勢朝次著	京都女專教授 田中仁三著	文學博士 吉澤義則著	女子學習院教授 佐成謙太郎著	京大助教授 穎原退藏著	風俗研究所長 江馬務著	東京文理大教授 能勢朝次著	文學博士 新村出著	奈良女高師教授 木枝増一著
送價菊料 二二三 四十五 二十一 錢錢頁	送價菊料 二二三 四五 五十八 錢錢頁	送價菊料 二一二 四〇 八十二 錢錢頁	送價菊料 二一二 四一 八十六 錢錢頁	送價菊料 二二三 四二 五十六 錢錢頁	送價菊料 二二三 四五 五十六 錢錢頁	送價菊料 二二三 四三 五十六 錢錢頁	送價菊料 二二三 四一 五十八 錢錢頁	送價菊料 三四六 四五 五六 錢圓頁

筆執家大門專各 座講大學文國

◇古今和歌集選釋	◇平家物語選釋	◇枕草子選釋	◇源氏物語講義	◇萬葉集選釋	◇古事記選釋	◇國語學史	◇國文學史
文學博士 尾上八郎著	東京女高師教授 石川佐久太郎著	三高教授 島田退藏著	奈良女高教授 岩城準太郎著	京大助教授 澤瀉久孝著	三高教授 阪倉篤太郎著	文學博士 吉澤義則著	文學博士 藤井乙男著
送價菊料 二一二 四一 五十八 二十一 錢錢頁	送價菊料 二一二 四一 五十八 二十一 錢錢頁	送價菊料 二二四 四四 五〇 錢錢頁	送價菊料 二二四 四〇 五十二 錢錢頁	送價菊料 二二二 四八 五十八 錢錢頁	送價菊料 二二三 四八 五十六 錢錢頁	送價菊料 二二四 四〇 五十八 錢錢頁	送價菊料 二二三 四〇 五十八 錢錢頁

◎本書は嘗て本會に於て出版して噴々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した爲學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の内特に文檢受験者必須なるものを選択統一したものである。

筆執家大門專各 座講大學文國

◇江戶文學概說	文學 士藤井乙男著	送價菊料判 二二二 八二二 錢錢頁
◇更科、泉式部、紫式部 日記講義	宮田和一郎著	送價菊料判 二二四 八二五 錢錢頁
◇西鶴五人女評釋	鈴木敏也著	送價菊料判 二二三 八二二 錢錢頁
◇大鏡增鏡鏡類選釋	金子原亮一著 堀江秀雄著 荒瀬邦介著	送價菊料判 二三五 八二八 錢錢頁
◇保元物語大平記選釋	清水泰衛著	送價菊料判 二二三 八二八 錢錢頁
◇徒然抄講義	金子彦一郎著 木枝增一郎著	送價菊料判 二二二 八二〇 錢錢頁
◇江戶時代風俗史	風俗研究所長 江馬務著	送價菊料判 二二二 八二六 錢錢頁

910.8
K.45

終